

を分かりやすく伝えることと、適切なアドバイスを行うことは、簡単ではないですし、通訳にしても第2部と第3部では同時通訳が求められ、主催者側の力量が問われる時間でもありました。第3部は、卒業生による体験談の発表でした。

ガイダンスが終わった時点で、参加者にアンケート記入をお願いしましたが、そこに書かれていたコメントには多くの感謝の言葉や、ここへきてよかったという記述がありました。また、もっと多くの情報が欲しいという要望も同時に書かれていました。ガイダンスを実施して良かったという安堵感と、今よりもっとわかりやすいものへ工夫・改良を重ねていこうというモチベーションを高める機会にもなりました。

アンケートで有意義な時間が持てたという感想が数多く聞かれた理由として、次の要因があげられます。

一つ目は、卒業生の皆さんによる体験談の時間を設けたことです。体験談発表者は、外国人児童生徒として日本の小中学校で学び、国籍や母語や日本における滞在年数などは多様なバックグラウンドを持つ、日本で高校進学を経験した現役の高校生に加え、大学への進学をも果たした学生または社会人でした。発表の内容は、高校入試についての成功談もあれば失敗談もあり、また日本での生活や学校生活などでの苦労話もありました。この「先輩」たちの口から語られる真実は、良きロールモデルとして参加した生徒や保護者の心を大きく動かし、受験に立ち向かう勇氣と希望を与えました。

二つ目は個々の疑問に答えるため質疑応答の時間を設けたことです。担当してくださったのは、教育委員会の先生をはじめ県内の小中学校の日本語教室を担当されている先生や、中学校の進路指導を担当されている先生、高校の先生です。それぞれの立場で、的確な助言をしてくださったことに参加者は不安な気持ちを払拭できたことでしょう。

こうして、進学ガイダンスに参加して得た情報が、生徒の在籍する学校での進路相談に役立ち、無事に志望する高校への進学を果たすことができた生徒が徐々に増えていきました。大学での進学ガイダンスが軌道に乗り、また要望のあった市町のガイダンス実施にも協力する体制が整い、回数を重ねる度に参加者の出身言語が増えていき、資料は現在8か国語に翻訳されています。

表1は、2010年度から2019年度までのガイダンス開催状況を示しています。2010年度は、本学で1回開催、2011年度には、本学での開催の他、外国人児童生徒が多く学ぶ地域での開催を計画し、真岡市において開催しまし

た。2012年度には、真岡市、大田原市、小山市において開催しました。以降、各市教育委員会と共催する形で、継続的に地域でも開催してきました。2010年度から2019年度までの10年間で、HANDSはガイダンスを計28回開催しましたが、そのうち本学開催が9回、地域開催が16回、下野新聞社栃木県高等学校進学フェア会場での開催が3回です。

そして、実施回数を重ねるごとに課題もいくつか見えてきました。進学ガイダンスに参加することで情報不足という不安は解消されたとしても、進路を選択する課程において、学業成績が志望校を選ぶ判断材料となる現実は消えません。つまり、未だに公立高校の学力検査がこの子らにとってハードルの高いものとなっていることに変わりはないということです。なぜかという、外国にルーツを持つこの子どもたちの間でよく言われているように、生活言語と学習言語の習得には時間差があるので、たとえ長く日本で生活し、日本語が流ちょうに話せるようになったとしても、高校受験の時期を迎えるころまでに高校入試問題を突破できる学力を備えることは容易ではないのです。

外国人の定住化が進んだ現在では、日本に長期にわたって滞在する家族が大半を占めるようになりました。しかし、現行の高校入試における特別措置は滞日年数制限が本県の場合は3年と短く、多くの外国人児童生徒のニーズに対応しているとはいいきれません。高校入試に関しては、特別な配慮を今後も要望していくことを期待しつつ、小中学校の現場においてもこの子らの将来を見据えた学習計画を立て、日本語の早期習得に向けて指導方法を確立していく努力を惜しまないことを期待します。

また、高等学校という、義務教育の枠から外れたところで、外国にルーツを持つ、日本語の習得がまだ十分ではない生徒に対して特別な学習支援が施されることを期待するのは、容易なことではないのですが、近年彼らの母語を話す教員を配置し、支援の手を差し伸べている学校も出てきました。彼らの学びをこういった側面で支援していただけのは大変ありがたいことです。

子どもの成長と学びは、幼児教育、初等・中等・高等教育と個々に考えていくものではなく、ひとつのまとまった線上で構築されるべきで、外国にルーツを持つ子どもひとりひとりの学びもこういった長いスパンでとらえていく視点を養うべきと思うのです。

本学が全国に先立ち外国人入試を実施したことは、この考えに基づくものであると思います。力のある生徒がその実力を発揮する場所を途中で見失うことがないように、学びの機会を与えてくれています。

進学ガイダンスは、2018年度より本学開催に替えて下野新聞社主催の栃木県高等学進学フェアの会場で実施しています。こ2018年度に1回(宇都宮会場)、2019年度に2回(宇都宮会場と栃木会場)開催しました。本フェアの宇都宮会場では、主に県北と県央の高校が、栃木会場では主に県南の高校が数多く参加し、ブースを設けて各高校の情報提供やPRを行っています。このような一般の受験生や保護者が来訪し、多くの情報が得られる会場で、多言語による進学ガイダンスが開催できることの意義は大きいと思われます。メイン会場と異なる別室でガイダンスを行いますが、来訪者は必要に応じてメイン会場で様々な情報を得ることができます。フェアに参加する形でのガイダンスでは、従来行っていた全体説明会や体験談発表は実施せず、言語別のテーブルで時間をかけて情報提供と相談に乗る形を軸にしています。ガイダンスの開催時間も限られたものではなく、オープンにすることによって、開催時間に間に合わず遅刻してしまう参加者に対応できるようになり、また時間の許す限り、相手の話に耳を傾け、基本的な情報に加えてさらに多くの情報を伝えられるようになっています。高校進学に向き合う多くの高校生が集う雰囲気も、外国人生徒に大いなる刺激を与えていることでしょう。フェアに参加することによって、志望校の情報がよりよい形で得られるようになりました。

生徒や保護者のニーズに合ったガイダンスを開催しようとするなら、参加者の地域情報は、不可欠アイテムだと思います。私の住んでいる県南では、地域ごとのガイダンスが開催されています。大学主催のメリットを生かしながら、今後はさらに地域ごとの開催ができ、その地域ならではの情報を提供できるようなガイダンスがごく当たり前のように行われることを期待せずにはいられません。

### 『多言語による高校進学ガイダンス』10年を迎えて

真岡市立真岡東小学校教諭 佐藤 和之

2010年に宇都宮大学で始まった「多言語による高校進学ガイダンス」が昨年で10年を迎えました。「日本語を母語としない子どもたちと保護者に対して、日本の教育制度や高校受験に関する情報を正確に提供する」ことを目標に開催されて来ました。10年間で感じたことを書かせていただきます。

当初、日本の受験制度についての説明、そして新設された「総合学科」や「特色選抜」についての説明など、膨大な情報を時間内で懸命に説明しました。しかし、徐々に地域開催が多くなると、基本的な説明の他にその地域の情報

が求められるようになりました。費用についても概算ではなく具体的な金額を求められるようになりました。生徒と保護者には進学への関心が、開催当初に比べて徐々に高まりつつあると感じています。2018年から始まった下野新聞社主催の高校進学フェアに参加する形でのガイダンスでは、言語別ブースでの説明から個別相談と言う形になってきました。それに関連して、私たち運営側が提供する内容もより地域に応じたものであることが必要であると感ずるようになりました。将来就きたい職業には通学できる範囲でどの高校に進学する必要があるのかとか、うちの子にはどんな受験対策が必要かとか、子どもの日本語能力や学力ではどの高校に入れるのか、はたまたそれぞれの高校の大学進学率はどうかなど、日本の教育制度の概略から説明をしていた「ガイダンス開始当初」とは質問の質も随分変わってきたことに驚いています。

また、ガイダンスに参加したHANDSジュニア(宇都宮大学学部生)や県内の高校生は、身近な国際化の現状を目の当たりにする貴重な機会になったと思います。県内外の国際交流イベントに何度か参加したことがあるという彼らも、自分たちの周りに日本の高校に進学したいという気持ちを持ちながら、情報の欠如によりこんなに苦労している人たちがいることに気づく良い機会になったと思います。やる気や能力があるのに、日本語による学習が十分ではないということ、そして日本の教育制度を理解していないことにより、日本人の大部分の生徒が高校等に進学しているという状況で、進学できなかつたり自分の望む高校ではなかったことにより退学してしまったりしている状況が身近にあること、奨学金制度を知らないために進学を断念していることなど、親身になって情報を伝えてあげれば進路や将来が変わるかもしれないことを、参加した若者たちは実感したことと思います。そしてこれからの多文化共生の社会において、中心的な役割を果たしてくれるであろうことを期待したものでした。

現在、私は栃木県の小学校で外国人児童に日本語を教えています。一番の気持ちは6年生のパキスタン国籍Aさんです。彼はとても能力が高く母国語と現地語と英語の三つの言語の読み書きをマスターしています。しかし日本語は片言しか話せません。Aさんは日本で大学まで進学することを希望していますが、小学5年生の後期に編入学したため、栃木県の高校入試において帰国外国人特別措置は受けることができません。私の責務として、小学校卒業までに日本語会話と教科学習で使う日本語を身に付け



させたいと思っています。さらに、行政にはどうか帰国外国人特別措置の来日5年間まで延長をお願いしたい気持ちです。彼のような意欲も能力もある子どもが、日本語能力が十分ではないという理由で進みたい進路に進めないとしたら残念でなりません。そして、さらに頑張って進学を果たした外国籍の高校生への日本語の配慮も同時にぜひ行って欲しいと思います。他県では高校入試において「帰国外国人枠」があるところ、また、高校進学後も日本語の支援がある高校もあると聞きます。努力して高校進学を果たした生徒に対して、本県においても小中学校に引き続き日本語の支援が望まれるところです。

HANDS進学ガイダンス、10年の歩み…本当にいろいろなことがありましたが、振り返ってみると「できるだけ早く情報を提供してあげたい」と強く思っています。中学生になってからの方が確かに進路を見据えてのより具体的な「情報提供」になりますが、日本人家庭に対して圧倒的に高等学校についての情報をもっていないのが現状です。できれば小学生のうちにガイダンスに参加して親子で日本の教育制度について知識をもつことで、その時々何をすればよいのか、どう頑張ればよいのかを考えるきっかけになると思います。最後に、この「多言語による進学ガイダンス」は毎回の参加者アンケートで高い満足度を得ています。今後も様々な機関や人々のご理解とご協力のもと、これからも続いていくことを願っております。

### 進路指導の現場から思う、ハンズの取り組み10年

栃木県中学校教育研究会 キャリア教育・進路指導部会 研究委員 山中 亮

宇都宮大学国際学部の「多言語による高校進学ガイダンス」の協力スタッフにと、声をかけられてから10年も過ぎました。それまでも、日本に来て学習に苦しみながらも、懸命に生きようとする外国人・日系人と多少は接する機会がありました。本人よりもそれ以上に日本語が分からない保護者との対応は難しいものでした。学校生活では、友人も作れ日本の生活になじんできても、卒業となると高校進学問題、就職問題のハードルは高いのです。

今、中学校の現場では多種多様な問題に追われ、多忙の一言です。生徒の将来につながる「キャリア能力」の育成が急務であると言われ、自分は関東や全国での研修等に参加し、その必要性を大きく感じ、栃木県内での研究大会の主催者側になり、20年近く携わってきました。しかしその実践となると、どうでしょうか。校内でその余裕があ

るでしょうか。別に目新しいことをやるわけではないのに、「キャリア教育」は二の次です。友人トラブルの生徒指導や保護者対応、前年どおりで進む学校行事の準備。本当に伸ばしたい、伸ばすべき子どもたちの力は、人それぞれです。どう生きるかは、自分で考え、自分で求め、もっと自由があるのだけれど、一斉指導の中でどれだけ一人一人に寄り添えるのでしょうか。やっていないわけではないが、十分とは言えない。もっと、子どもたちにいろいろな生き方、考え方があることを伝えたい。まだ見つからない自分の力を知り手がかりを探すような取り組みをしたい。——今年3月定年を迎え、やり残したことがばかり思い浮かびます。

さて、ハンズの取り組みもまた、学校現場からすると、多忙の中十分ではない「キャリア教育」を補完する大きなものでした。出会った外国人の子どもたちは、ほとんどが日本での生活を希望していました。日本と母国の間での夢を語れる子。まだ日本での生活がままならない子。「多言語による高校進学ガイダンス」は、そんな子どもたちの話を聞き、スタッフでアドバイスをするだけの機会ですが、本気で応援する気持ちを伝えてやりたかった。表情が少しでも明るくなって会場を出て行く姿を見ることしかできなかった。その後、どうなったのでしょうか。ガイダンスへの参加者は、県内の中学生のほんの一部に過ぎないことも事実です。しかし、このような機会を作ることで、学校現場での進路指導(キャリア教育)を立派に補完していることが重要なのです。これから、このような取り組みが、各地で開かれ、身近な相談の場として広がること。学校現場との相互理解が深まること。これまでに果たしてきた実績も大きいですが、今後の活動への期待が大きい取り組みだと改めて思います。

### フィリピン語の通訳者として

フィリピン語の翻訳・通訳者 市川恭治

私は京都で生まれ、大学は静岡大学で農学部を卒業しました。大学卒業後、上智大学でフィリピン語を学びました。現在、環境問題のコンサルタントとして、フィリピンの環境にかかわりながら、フィリピン文化研究会を主宰し、アジアからの出稼ぎ労働者支援などの、NGO活動にも関わっています。

HANDSとの出会いは2010年度で、以来、「多言語による高校進学ガイダンス」でずっとフィリピン語の通訳を務めてきました。フィリピンやフィリピン語とは、通訳・翻訳者などを通じて、HANDSと出会う前から、長年関わってきました。HANDSは

『中学教科単語帳—日本語⇄フィリピン語』という立派な学習辞典を刊行しましたが、私はこれまで、『日本語—フィリピン語実用辞典』(1994年)、『日本語—フィリピン語両用会話集—出会い・プロポーズ編』(2002年)、『日本語—フィリピン語両用会話集—結婚・生活編』(2005年)、『フィリピン語—日本語実用辞典』(2006年)の4冊を出版しました。

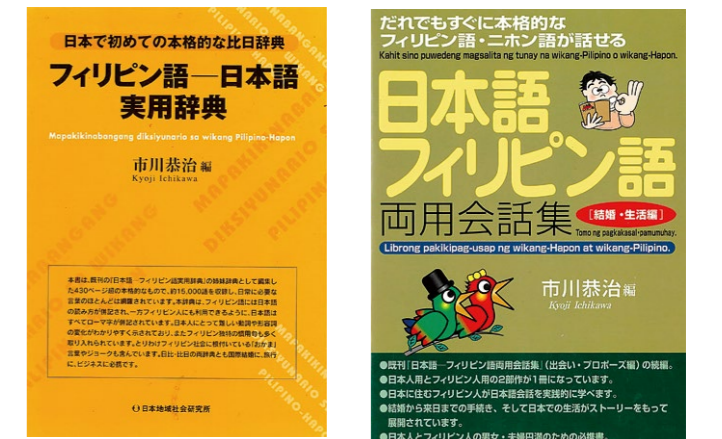
最初の辞典である『日本語—フィリピン語辞典』は、現代フィリピンとの交流を深めるために、日常会話に必要な9000語の日本語をフィリピン語(タガログ語)に訳し、文法なども解説したものです。日本人用の辞書ですが、少し仮名や漢字が分かるフィリピン人がもっと日本語を覚えるためにも使えるように工夫したものです。その続編といえる『日本語—フィリピン語—日本語実用辞典』は、430ページ超の本格的なもので、約15000語を収録し、日常に必要な言葉のほとんどは網羅されています。本辞典は、フィリピン語には日本語の読み方が併記され、一方フィリピン人にも利用できるように、日本語はすべてローマ字が併記されています。日本人にとって難しい動詞や形容詞の変化がわかりやすく示されており、またフィリピン独特の慣用句も多く取り入れられています。日比・比日の両辞典とも国際結婚に、旅行に、ビジネスに必携です。HANDSのフィリピン語単語帳で勉強した児童生徒が大人になったら是非勉強に利用してほしいと思っています。

宇都宮市内の小中学校に在籍するフィリピン児童生徒への学習支援(日本語指導)にも日本語指導員として10年以上関わってきました。現在は、コロナの影響でキャンセルになった案件もあり、1人のフィリピン人小学生の指導をしています。長年の経験からすると、統計的には確認していませんが、高校進学できない、あるいは高校入学できても中途退学してしまうフィリピン人生徒は他の国籍・母語の外国人生徒よりも多い気がします。だからなのか、宇都宮大学国際学部のフィリピンルーツの学生に会うと、よくここまで来れたと嬉しくなります。厳しい状況に直面しているフィリピン児童生徒と出会ってきたことが、HANDSに関わってきた大きな要因ともいえます。

現在、日本で暮らしているフィリピン人は、中国、韓国、ベトナムに次いで多く、約28万人います。栃木県では、5千人を超えるフィリピン人がいます。今後、もっと増えていくのではないのでしょうか。

私自身教育支援に関わってきたことから特に感じているのかもしれませんが、HANDSのような教育支援の活動は、ある意味地味で、顕著な成果がすぐに見えるような形で出てくるわけではないものです。そのような活動を地道に10年進めてきたことは実は凄いことに関係者に敬意を表したいと思えますし、その一躍を担ってきたことを感慨深く思います。今後

とも、フィリピンとの交流、未来を担う子どもたちの教育支援に取り組んでいきたいと考えています。



## ガイダンス体験レポート

### 夢を執とう、人生は自分次第!

豊田市立保見中学校教員 伊木 ロドリゴ

私の名前は、ロドリゴです。ブラジルで生まれました。27才です。愛知県の豊田に住んでいます。その豊田市で英語の先生をしています。

10才で日本に来ました。その時、日本語は全くわかりませんでした。私は、日本語の能力がゼロだったので、みんなから「ばか」とよく言われていました。

先ほどの高校進学ガイダンスの話を、小中学生のみなさん、興味を持って聞いていましたか?自分たちがこれが欲しいな、これがないと困るな、と思ったら、自分で本気になって選ぶと思います。だから、この高校ってどんな部活があるの?その高校に行ったら、どんな勉強ができるの?ということ自分で考えると、楽しそうな学校を選べるんじゃないかな。

僕のお父さんがある日、汚い作業着を着て帰ってきて、「ロドリゴ、お前もこうなりたいのか。汚い作業着を着て、仕事したいのか?」と言いました。

僕は、「いやだ」と答えました。「じゃあ、お前の今の仕事は何だ?」と言われ、「勉強かな」と答えました。学校に行くと、勉強する一番の理由は、今学校に行くと学ぶことがあとでそれが君たちのご飯になる、君たちが欲しいカッコいいバイクになる、車になる、フットサル場付きの家になるから、だと思います。

仕事をしていると単調な毎日だな、仕事に行きたくないな、と思う日もあります。でも、学校に行くと、部活ではサッカーを、授業では英語を教えていて楽しいですし、学活の時